

菊池 雄太 (1509027)

〈序論〉

研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボールはチームスポーツに属し、集団戦術が要求されるスポーツである。その中にも攻撃と防御にはそれぞれ個人戦術があり、ハンドボールの基本ともいえる「1対1に始まって、1対1に終わる」ということについて考えた。筆者はハンドボールにおいて、攻撃の華麗な突破やシュート場面に魅力を感じてきた。しかしその場面に至るには、ディフェンスを突破し、フリーな状況を作り出す必要がある。その手段としてフェイントを成功させ、攻撃を有利な状況に展開していく必要がある。筆者はゲームメーカーとしての役割を果たすために、攻撃の起点を作りつつも1対1の突破も狙い、状況を打開して攻撃を有利に展開するために必要となるフェイント行為について理解を深めていきたいと考えた。

本研究の目的は、攻撃の個人戦術において、1対1の突破に必要なフェイント行為に着目して運動観察し、類型化することである。その際、それぞれの典型的なフェイント行為の運動組み合わせの構造をマイネル運動学における運動モルフォロジー的に明らかにしていく。そして、そこで見出された課題を今後の競技生活や、指導の場面で生かしていきたいと考える。その方法として、ビデオによる印象分析を中心に進め、運動を間主観的に捉えていく。具体的には、様々な研究対象、構造特性、個人戦術の体系を把握したあと、平成24年度全日本学生ハンドボール選手権大会における上位に進出した大学のフローター選手を観察対象とする。ここから、フローター選手が起点となった攻撃場面で、とくに1対1のフェイントによってシュート到達までつながった、あるいは突破することができたものに限らず、典型事例となりうるフェイントを印象分析に基づいて抽出し、分析、考察を行う。全日本学生ハンドボール選手権大会を対象とした理由は、学生は高度な競技力の仕上げと定着の段階にあり、専門的な領域にあること、また、筆者自身も全日本学生ハンドボール選手権大会に出場し、実際にレベルの高い試合を目の当たりにしたことから、より深い考察ができると考えたためである。

〈本論〉

第1章 ハンドボール競技の構造特性

ハンドボールは、ボールを手で相手チームのゴールに投げ入れ、自分のゴールを相手の攻撃から防御することにあり、多面的な身体能力、スポーツ的達成能力を求められるチームスポーツである。ここではハンドボール競技の特性についてまとめ、ボールゲームにおける1対1の重要性を明確にし、個人の技術と戦術的能力との関連を明らかにしている。

その中で、本研究の運動要素となるフェイントについての概念もまとめている。

第2章 ゲームの運動観察方法について

ゲームの運動観察について、試合分析の重要性を述べるとともに、そこにある運動モルフォロジー的考察法の必要性や、共同観察を用いることにより、他者観察の自己観察化をより充実させ、客観的な運動分析を行うことができることを明らかにしていく。その際、1対1状況におけるフェイントの本質を見抜いていくために、マイネルの運動カテゴリーの中から、特に「運動の局面構造」、「運動の先取り」、「運動リズム」、「運動の正確さ」を用いて印象分析を行う。この場合「類型化」とは、様々な物事の中から、共通点や類似点を抽出し、いくつかの類型に分けて普遍化することである。すなわち1対1によるフェイントに着目して観察していく中で、そこから動きの形態の共通部分、類似点を抽出して、運動の組合せ・構造体系を明らかにすることが本研究における類型化の捉え方である。これによって、それぞれの動きの本質を理解することや、フェイントの特徴を知ることにつながる。

第3章 ゲームにおけるフェイントの類型化

この章では、全日本学生ハンドボール選手権の試合の中で行われている、フェイントの印象分析とその結果の考察を行い、既存のフェイント体系を基にしながら、フェイントの類型化を明らかにしようと試みた。結果として、筆者の知識と経験を踏まえながらフェイントを以下のように分類することができた。

①突破フェイント	②シュートフェイント	
—ストライドフェイント	—ステップシュートフェイント	
—ゼロステップフェイント	—ジャンプシュートフェイント	
③回旋フェイント	④回転フェイント	⑤パスフェイント

〈結論〉

本研究では、試合におけるフェイントの運動経過を質的に観察し、考察していくことでフェイントを大きく5つに類型化することができた。フェイントはこのように選択肢として整理しておくことが有効である。実践する際、ある程度自身の中で実行する選択肢を決めておく必要があるが、緊張した心身の状態での試合の中で、状況に応じた最も良い選択肢ができることが理想であると考えられる。めまぐるしく状況が変化する試合の中で、状況に応じた最も良い選択肢は何なのか判断していくためには、多くのフェイントのバリエーションを身に付けておくことが課題として挙げられる。運動経過にしっかりと目を向け、自身の運動として知覚し、運動の構造を明らかにすることで、競技力または運動技能を高めていくことにつながっていくと考える。

(引用・参考文献省略)